コレンテ　vol. 45　n.411　　febbraio 2025

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

カルヴィーノとアーティチョーク㊽

＊パリの隠者（2）＊

堤 康徳

カルヴィーノがパリに移住して一年足らずで、「五月革命」と呼ばれる学生の大規模な反政府運動が勃発した。カルチェ・ラタンにバリケードが築かれ、フランス各地でデモや工場占拠が起きた。カルヴィーノは図らずも、できごとの渦中に巻きこまれた。デモ隊に加わった義理の息子マルセロ（妻チキータの連れ子）が逮捕されたのである。ことの経緯を、カルヴィーノ自身の言葉でたどってみよう。親交のあった記者ミケーレ・ラーゴ宛ての手紙（日付は 1968 年 7 月 27 日）から一部を引用する。

さて、ここ数か月の私たちの生活を時系列に沿って手短かにきみに伝えておきましょう。最初にバリケードが築かれたとき、私はチキータとオランダへの講演旅行中でした。バリケードに立って戦ったマルセロは無傷。ソルボンヌ大学が占拠され、最初の工場占拠が起きた輝かしい日々に私たちはパリに戻りました。それからすぐにイタリアに駆けつけ、（講演旅行中に昔の子守に預けてあった）娘を引き取り、投票をすませたのです。しかし交通機関のストライキにより、イタリアに釘付けにされます。トリノで不安な待機の日々を過ごします。その間マルセロが逮捕され、24 時間ボジョンの警察宿舎に拘留されるも釈放。しかし今や、外国人学生が出歩くのは危険です。トリノで、フランスに返さねばならない車をレンタルし、往復に必要なガソリン 2 缶を積んでパリに向かいました。車も地下鉄もなければ、店先の行列もない、すばらしいパリの最後の日々をそのときを体験したのです。それから、ド・ゴールの演説があり、ド・ゴール派の車がクラクションを鳴らしてカルチェ・ラタンに侵入しようとしましたが、追い出されました(I. Calvino, *Lettere 1940–1985*, cit., p. 1009)。

このあと、カルヴィーノは自身の車にガソリン 2 缶を積み、マルセロを乗せ、一家でイタリアに向かったのだった。そして、反乱の「悲しい結末はイタリアからラジオで聞くことになった」。

学生と労働者によるこの反体制運動が社会にもたらす変化について、「ヨーロッパにおいて何かが実際に変わったように私には思われます。まちがいなく、労働者を含む新しい革命勢力の組織化に向かうことになるでしょう」という肯定的な所感を述べる一方で、その見通しについて次のように素直な思いを綴っている。

私にはいかなる予測を立てることもできません。私が言うことすべては、古い規範に従うものか、あるいは、根拠のないものであることを私は知っています。これは私たちの世代に共通の状況であって、フランスで見られたことですが、唯一場違いだったのは作家たちでした、それがどんなに善意からの言動だったにせよ。結局、いま私は、観客という理想的な立場にいるのです（*Ivi*, p. 1010)。

カルヴィーノは、運動の当事者たちとの世代間ギャップを認めたうえで、自らはパリの隠者としてその観客に徹することを選んだのである。それから十数年を経た 1980 年のあるインタビューで、カルヴィーノは、1968 年 5 月にさかんに叫ばれたスローガン「想像力を権力の座に」について触れながら、運動全体についても懐疑的な評価を下しているように見受けられる。

「想像力を権力の座に」は立派で誘惑的なスローガンですが、そこから生まれ出たものはまったく何もありません。今日いかなる想像力であろうと権力の座につくかぎり、私は恐怖を感じます。それが災いの前兆のように思えます。政治にたいして私はとても限定的な目標しか期待しません。思うに、大切な運動は、社会の運動であって、政治と権力がほぼいつも知らない間に生起する運動です。あとになってから初めて権力はそれに気づきます。なぜなら、権力はつねに誤った計算をするからです。予測の学問、いま起きつつあることを予測する学問は存在しません（I. Calvino, *Sono nato in America... Interviste 1951-1985*, cit., p. 371)。

1968 年の異議申し立てと政治参加の季節にカルヴィーノが取り組んだ仕事のひとつが、「空想社会主義者」シャルル・フーリエの著作の編纂だった。カルヴィーノが作品の選択と解説を担当したフーリエの著作集は 1971 年にエイナウディより刊行されている。フーリエについてのちに作家は別のインタビューでこのように振り返っている。

フーリエに関する仕事をしたのは 1968 年 5 月の時代の空気のなかですが、ポレミックな意図を込めました。フーリエは実際には、自然発生的なものとは無縁で、緻密な組織を前提とする、欲望の社会を構想していました。当時もまた今日でも、解放のための必須条件とみなされている、ある種の実存的な跳躍とは正反対でした(*Ivi*, p. 421)。

カルヴィーノによれば、フーリエはけっして自然発生的ユートピアの信奉者ではなかった。たとえば、社会の単位としてフーリエが構想した協同体「ファランジュ」は、「810 人もの性格と気質の組み合わせ」(I. Calvino, *Saggi 1945-1985*, cit., p. 279) から成る細分化された複雑な構造をもっていたのである。

フーリエが示しているのは、反抑圧的な社会が、生命の衝動や混乱した自然発生性の解放を意味するのではなく、知識と正確さ、複雑な組織、分類精神、きわめて詳細なデティールから成る計画を必要とすることである。必要とされるのは、個人の単独性が万人の幸福にとって貴重であるという確信だけではない（*Ivi*, p. 405)。

フーリエの分類精神は、カルヴィーノが感嘆したパリのチーズ店の、あらゆる種類のチーズを分類し、命名する精神に通じるものである（本稿 2024 年 10 月号を参照されたい）。

カルヴィーノは、自然発生的な革命、あるいは「実存的な跳躍」による革命の限界を、1968 年の世界的な反体制運動から感じとっていたように思われる。

「世界システム論」の提唱者として知られるウォーラーステインは、1968 年を、1848 年に次ぐ第二の世界革命と呼んだ。彼は 1989 年の著書『反システム運動』の冒頭で次のように書いている。

世界革命はこれまでに二回だけ起きている。最初は 1848 年に、二度目は 1968 年に起きた。どちらも歴史的失敗に終わった。どちらも世界を変えた。どちらも計画されたものではなく、したがって深い意味において自然発生的だったという事実が、ともに失敗に帰したという事実と、ともに世界を変えたというふたつの事実を説明している（Giovanni Arrighi, Terence K. Hopkins and Immanuel Wallerstein, *Antisystemic Movements*, London- New York, Verso, 1989, p. 97)。

フランスの二月革命に端を発してヨーロッパ全土に波及した四八年革命と、世界の主要都市でほぼ同時多発的に起きた 1968 年の学生による反

体制運動が、世界革命と呼びうるかどうかについては見解が分かれるところだろう。しかし、1848 年も 1968 年も、「深い意味において自然発生的(in a profound sense spontaneous)」だったがゆえに失敗し、世界を変えた、というウォーラーステインの指摘がそれ自体でとりわけ興味深い。あらかじめ挫折が予想されてはいても、自然発生的でなければ世界革命は達成されえない、とも読めるからである。

カルヴィーノ家に話を戻そう。68 年当時、作家は 40 代半ば、学生のデモに加わったマルセロは 18 歳だった。息子は、このときの父親の姿勢を次のように評している。

> 結局のところカルヴィーノは、彼の世代の多くがそうであったように、68 年の本質をほんとうは理解せず、意表を突かれたように当惑していました。いずれにせよ彼にとって、政治参加の季節はもはや遠ざかり、過ぎ去ったものでした。たとえ、社会が病んでいるということにはもちろん気づいていたにしても(Fabio Gambaro, *Lo scoiattolo sulla Senna*, cit., p. 118)。

五月革命をめぐる作家の態度を、息子はかなり冷めた目で見ている。しかしその一件以前に、思春期を迎えた少年の目に新しい父親となったカルヴィーノは、どのように映っていたのか。

> 私にはとても思いやりがありました。私の話を聞き、議論をし、私の質問にはいつも答え、私がイタリアを発見するのを手伝ってくれました。とてもまじめでしたが、ある意味ユーモアもありました。要するに、よき父親だったのです(*Ibid.*)。

一方、実の娘ジョヴァンナの父親評はより手厳しい。

> 私の父は、思春期の娘をどう扱えばいいかわかっていませんでした。私を守りたかったのでしょうが、それがうまくいくとは限りません。私が幸せのはずだと思いこみ、私がそうではないと怒りました。ときどき、私の母は臆病の殻から出るように私を促しましたが、父は必ずしも同意見ではありませんでした。この視点から見れば、父はまったくフェミニストではありません。若い頃に自分の家族のなかで体験した厳しい態度で私にも臨んだのです(*Ibid.*)。

カルヴィーノは、両親ともに知識人のコスモポリタン的な家庭環境に育った。また彼自身の子育ても主に国際都市パリにおいて、イタリア語、フランス語、スペイン語の三言語が家庭内で飛び交うような環境で行われた。とはいえ、愛するひとり娘にたいする対応は、同世代の父親と大差なかったのだろうか。

【パリ時代のカルヴィーノ一家】

出典元:https://www.lombardiabeniculturali.it/fotografie/schede/IMM-LMD90-0001607/

＜参考文献＞
熊野純彦『マルクス　資本論の哲学』(岩波書店、2018 年)

(イタリア語講師)

＊冬のミラノの冒険を経て思う、

金言と信頼と Parolacce＊

山田 晃裕

去る 2024 年 12 月半ばに、当アカデミーとして 24 回目のイタリアツアーを行った。7 泊 10 日の旅程で渡航したのは、子どもと大人合わせて 19 名。冬のミラノをいろんな意味で満喫した。

大人も子どもも苦しんだのは、nebbia が運んでくる湿り気のある寒さ。日中も霧に包まれるという経験自体は見た目にも新鮮だったが、肌を刺すような冷たい空気に触れ続けるのは確かにしんどかったと思う。

一方でクリスマスムードの高まる街並みには心踊らされるものがあった。ドゥオーモを中心に街中にあるクリスマスツリーめぐりを楽しんだ。クリスチャン・ディオールなどの高級ブランドの煌びやかなものからレゴなど遊び心のあるものまで。とんでもない人混みを歩いているのに、寒さを忘れさせる高揚感があったのは確かだ。

サンシーロスタジアムでは、UEFA チャンピオンズリーグとセリエ A 公式戦の 2 試合を観戦。特に後者はクラブ創設 125 周年の記念試合とあって、キックオフ前のセレモニーが素晴らしかった。

歴史を彩ったレジェンドたちが次々に現れる。スターティングイレブン発表の時と同じく、ピッチ登場時に名前をスピーカーがコールし、観衆がレスポンスしていく。

まさか 1984 年生まれの自分がサッカーと出会う前から世界最高のストライカーと称されていた、マルコ・ファンバステン（元オランダ代表）の名前を高らかに叫ぶことになるとは思いもしなかった。

気温は 0℃だったが気分はキックオフ前にもかかわらず最高潮！エモーショナルなひと時の反動なのか、その後の 90 分間は凡戦（0-0 の引き分け）に終わってしまったが、圧巻だったコレオグラフィを筆頭に、あの場に居合わせた子どもたちにとっても記憶に残る一夜になったはずだ。

クラブ創設記念日が 1899 年の 12 月 16 日。さらに 125 周年だとは知っていて、カレンダーを眺めつつツアー催行の可能性を模索していた時から「この時期にやれば何かある」と察していたのだが、経験に基づく勘も捨てたもんじゃない。

AC ミランアカデミー部門によるトレーニングのほか、提携クラブとの交流試合まで内容盛りだくさんの 7 泊 10 日の旅となった。

今回の旅を終えて、これまで渡伊したスクール生総数は 274 名を数える。10 代での海外経験は飛躍のための「ロイター板（跳箱の踏切板）」のようなもの。

継続的な円安時代は確かに苦しい。世界への扉が遠のいていき、その扉が重くなっていく印象もある。それらへの抑止力となり、こじ開け続ける経験値を有しているのが我々のミッションだと思う。国際感覚を養うために、イタリアのみならず世界各国と接点を作り続けることに注力していけるスポーツ団体でありたい。

また、今回の旅では、ある程度リピートしてきたこともあり熟成されてきたプログラムに、新たな風を吹き込もうと準備段階から自らにチャレンジを課してきた。

そのうちの 1 つが、日本代表 GK の鈴木彩艶（すずき・ざいおん）選手が在籍するパルマ・カルチョ1913 の訪問。14 年もやっていればサッカー業界のネットワークも幅広くなってくるもので、幸運にも同クラブのスタッフと繋がることができ、ミラノから 1 時間半ほどをかけてパルマへと向かい、練習を終えた後の鈴木選手とお会いすることに。

指導者としてうれしかったのは、子どもたちに向けてのメッセージをいただいた際、まず彼の口から出てきたのが「ミスを受け入れること」「顔を背けずたくさんミスをしよう」という言葉だったこと。GK という「ミスすれば即失点」というポジションだからこそ、失敗の先にあるものが明確に見える。

他のプレーヤーよりも明確に見えるからこそ、目を背けずに立ち上がり、より良い自分を目指すことができるものである。大きな体躯から放たれるプレーには画面越しに見ていても惚れ惚れするものがあるが、彼の口から放たれた言葉はまさに「金言」。子どもたちに寄り添ってくれるようなやさしさに溢れたものだった。

毎回のことだが、この手の旅は準備段階から帰国して「解散！」と口にするまで、なかなかの重

圧にさらされる。悔しいことに今も昔も、日本人でイタリア語を扱えるのはこの組織において自分だけ。単純作業であれ若手スタッフに振りにくいところもあり、比較的孤独を極める（人材発掘に時間を割けるように努力するのみ！）。新たなイタリア人コーチがCOE発給待ちで不在の今は、愚痴のはけ口も身近にないときた。私が感じる孤独は極まるばかりである。

4ヶ月ほどかけて準備していく中で苦労を分かち合えるのは、長年のお付き合いがある旅行会社さん。そして、遠い海の向こうで待ってくれている人たちだ。ACミランのスタッフはもちろん、滞在を受け入れてくれるホテルや日々の足となるバス会社の人たちまで。やりとりはメールやWhatsappでの通話が主になるが、心を砕いてくれるのが良くわかる。

ホスピタリティがしっかりした企業を選ぶ嗅覚はあるようで、やりとりを重ねていく中で「こんちくしょう！」と思ったことはただの一度もない。

最も長くやりとりを続けてきたのが、現地のバス会社で働く事務員のモニカさん。はじめましての“Buongiorno”メールを送ってから13年の月日が流れた。オフィス勤務で社用携帯電話も持たないため、コミュニケーションはメールのみ。アプリ通話全盛の時代にありながら、必要に応じてオフィスに国際電話をかけることもある。

言うまでもなく、私と彼女の間にはメールだけで培ってきた「信頼」がある（私自身、こんなにも長く1人の女性と文通をしたことはない。笑）。それは組織としての信用を得た結果だし、日本から送り出してくれる、旅行会社やオペレーターの確かな仕事の成果があって初めて成り立つものだ。

13年もの間対面したことがないにもかかわらず「旧知の仲」であると公言できるモニカさんとは必ず顔を合わせたいと思っていた。とはいえ、コンテンツ盛りだくさんになってしまいがちで、毎度会うことができないまま時が流れている。しかし、今回のツアーでついにそんな歴史に終止符を打つ時が突如訪れた。

現地4日目の午後。連日の寒さに体力を削られて休息の必要性を感じ取った私は、「15時以降はホテルで休憩！」を通達する。ランチと洗濯、スーパーでちょっとした買い物を終えた一行はホテルへと戻りそれぞれの部屋へ。私も疲れていないといえば嘘になるが、時計を見ればまだ15時過ぎ。アペリティーヴォに出かけられるぐらい元気であるが、この日はショーペロで動くに動けない。

前倒しで帰着したため、この日のバスの運転手さんの稼働時間にもゆとりがある。思い切って「モニカに会いたいから、この後オフィスまで乗せてってくれないか？」と聞いてみるともちろん快諾。日本からのお土産をピックアップしてオフィスにお邪魔することに。

ミラノ郊外、ホテルから10分ほどのところにあるコムーネ・ブッチナスコへ。住宅街の中にひっそりと佇む小さな会社に足を踏み入れた。歩みを進めたところでモニカさんが待っていてくれていた。“CIAO”でも“PIACERE”でもなく、2人シンクロするかのように“FINALMENTE!!”と声を上げる。（頭部がクリスマス仕様なのは、この後スタッフ間でのプレゼント交換を予定しているからとのこと）

「初対面でも旧知の仲」とでもいうべきか。初めてなのにそんな気がしない話に華が咲くのは当然のことだった。お互いの文化や仕事について、エスプレッソを片手にあれやこれやとおしゃべりする。いつの間にか2時間も経っていて、ホテルでの夕食の時間も近い。名残惜しいがお暇することに（最後にはちゃっかり次のツアーの仮予約まで済ませておいた）。

メンテナンスを終えた運転手さんがホテルまで送り届けてくれるとのことで車に乗り込む。道中ふと彼が笑いながら言う。「今日のモニカはご機嫌だったな」と。さらに信頼が深まったことを実感し、帰路を急いだ。

苦労を分かち合える人は、帰り着いたホテルにもいる。2023 年のツアーからアッサゴ地区のとあるホテルをミラノ滞在時には利用しているのだが、主要スタッフの年齢が近いこともあってか、仲良くなるのにさほど時間はかからなかった。

打ち解けてくれれば言葉遣いもフレンドリーになるもので、客とサービス提供者の関係ではあるが、友人関係のようなやり取りも増えてくる（もちろんそこにはリスペクトとシンパシーがいい状態で共存している）。問題を解決し、懸念を払拭してくれる頼り甲斐のある仲間のような関係とでもいうべきか。私も彼らの仕事の邪魔にならない範囲で、レセプション近辺でのおしゃべりを楽しんでいる。

仲間意識が深まれば言葉遣いも変わるもの。私と彼らの間にちょっとした Parolacce はご愛嬌である。顔立ちの綺麗な女性スタッフですら、退勤前の雑談の最中に深まる霧を見れば「こんなんじゃ帰りの運転大変になるじゃない、“Ca**o!!!”」と、聞いているこちらもスカッとするほどのひと言を夜空に向けてぶつけていた。

ホテルマンである彼女が夜空に響かせた会心の一撃を、バリエーションでもパンチ力でもはるかに凌ぐのが、サッカー関係者のそれである。この 14 年間で耳にしてきた表現の幅は数知れず。息を吐くのと同じように、口から Parolacce が出てくる仲間がたくさんいる。

語学として捉えれば学ばなくてもいいものかもしれない。しかし、対人コミュニケーションを深める過程においては「通っておいた方がいい道」だと私は考える。なぜなら、対話において Parolacce を使ってくれることは、そのまま「シンパシーの証」のようなものだからだ。

大切なのは、言葉を向けられた時に、嫌悪感を放つものと親しみを感じるものを聞き分けられること、彼らの中に潜む TPO を見極めることだろう。前述の 4 つ星ホテルに勤める彼女だって、使える相手をしっかりと選んでいる。私がその使える相手の 1 人だと認識した上で、深まる霧への苛立ちを込めて“Ca**o”を放ったはずだ。「んもぅ！」ぐらいのつもりで。

イタリア人にとっては、日常の中で聞こえてくる音の一部。聞こえるからこそ自然と覚えていくもので、単語の意味を辞書で引いた形で捉えれば「下ネタ」というイメージが先行する。そこから忌み言葉のように捉えてきっぱり敬遠してしまうと、一歩踏み込んだ形のリレーションシップ構築が遠のいていくのではないかと感じてしまうのだ。

こういう点を踏まえると、イタリア語は我慢をしない言語だなと思う。日本語と比べて怒りもストレスもきちんと吐き出す表現が無数にある分、すっきりしやすいというか後に尾を引くコミュニケーションになりにくい。ストレスや怒りもオブラートに包んでしまう日本語のぼんやりとした印象とは大きく異なる。

呼吸と同じように Parolacce を吐くアカデミープロジェクトの指導者仲間たちが、帰国フライト搭乗直前にビデオ通話をしてくれた。いよいよ切るぞという時に“Noi ti vogliamo bene, testa di Ca**o”と言い放ち、笑顔で中指を立ててくる（それも複数で！笑）。

文法上と字面だけで捉えれば攻撃的な表現だが、信頼関係がしっかりしていれば立派な愛情表現である。ボーディングパスを準備しながら、私も愛情たっぷりに中指を立てておいた。“Grazie vecchioni, fate bravi!!”という言葉に、決して上手ではないウィンクを添えて。

（AC ミランアカデミー愛知）

編集・発行 /（公財）日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4
TEL：(075) 761-4356/FAX：(075) 761-4357
E-mail： centro@italiakaikan.jp
URL： http://italiakaikan.jp/